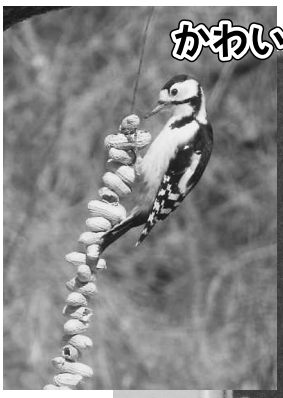
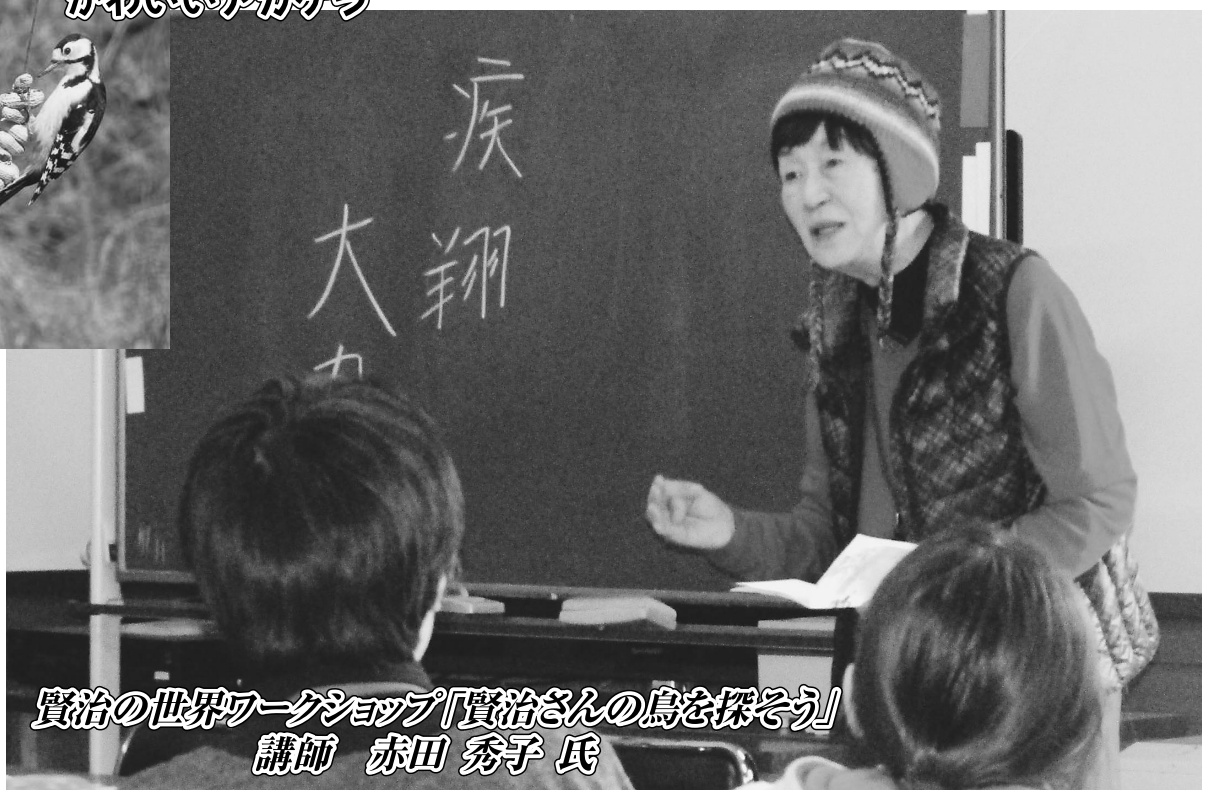
第114号　　平成28年３月20日発行（1）

宮沢賢治記念館通信

発行　〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1－1－36　宮沢賢治記念館　☎(0198) 31－2319　FAX (0198) 31－2320



かわいいアカゲラ



賢治の世界ワークショップ「賢治さんの鳥を探そう」
講師　赤田 秀子 氏

賢治記念館のリニューアルで取り上げた作品
―西域作品にまつわる情報―

宮沢賢治記念館リニューアル・アドバイザー　秋　枝　美　保

宮沢賢治記念館リニューアルで、展示に新たな内容を加えたいと思ったのは、西域作品の内、「雁の童子」の他、〔みあげた〕、「インドラの網」、詩「小岩井農場」などに登場する天童子のイメージの素材などを含む、賢治が得た西域情報についての新たな資料であった。

記念館の旧展示の中では、西域についての展示はかなり大きな部分を占めていたが、賢治の他の作品とのつながりがそれほど明確に示されていると言いがたいところもあり、多少唐突な感じを受けていた。それは、賢治の西域作品についての自分の理解が乏しいことに端を発しているとも言えるのであるが。西域作品は、〔手紙一〕・〔手紙二〕など初期のものから、第二集など中期の作品にいたるまで、長い期間にわたっており、賢治の西域への思いやこだわりには特別なものがあったと言える。その情熱の源について、もう少し関連資料を提示できないかとの思いがあった。それは、金子民雄が指摘するように、スタイン発掘の「有翼天使像」が紹介された英語の原書『カセイ砂漠の廃墟』(Ruins of Desert Cathay 1912) であるかもしれないが、賢治の作品を見ていると、執筆の動機はそのような教養としての間接的な情報だけではないのではないかという気がしてならなかった。賢治が見た天童子の画像的資料はもっと身近なところにあるのではないかということである。

『宮沢賢治イーハトーヴ学事典』における「西域」のトピックを担当した池澤夏樹は、賢治の情報源として「1902年以来３度に亘った大谷探検隊の偉業」にあったことを指摘し、第一次大谷探検隊に

参加した島地大等から仏教講習会の余談として西域情報を得たのではないかと述べている。池澤は、さらに「雁の童子」の話題の元になったミーラン発掘の有翼天使像について、スタインが発掘する前に第三次大谷探検隊の橘瑞超がこの遺跡を発見していたことに言及している（金子民雄『宮沢賢治と西域幻想』ｐ68、ｐ80）。また、池澤は、賢治の西域幻想が「どれも画像的で、何か図録のようなものを見たのではないかと思う」と述べ、その原資料として『西域考古図譜』（1915年）を挙げていた。

とりあえず、記念館リニューアル会議の時点では、大谷探検隊の活動についての研究書から天童子についての画像的資料を探すこととして、白須浄眞著『大谷探検隊とその時代』（勉誠出版　2002）を参照した。そこには、巻頭のグラビアの１頁目に二つの天童子の画像が掲げられているのである。ページ上段には、池澤が指摘した第三次隊ミーラン将来の「有翼天使像壁画断片」（東京国立博物館所蔵）、下段にはスバシ将来「楽人をえがく華麗な容器」（「舎利容器」東京国立博物館所蔵）がそれである。筆者は、この二枚の写真を、大谷探検隊の活動についての解説を付けて展示してはどうかという提案をした。特に、下段の「舎利容器」は大変美しいもので、円柱形の容器に円錐形の蓋がついており、側面には楽人、蓋には有翼天使が数人描かれている。これが出土したスバシは、「亀茲（クチャ）王国から唐代の天山山脈中部南麓の大伽藍遺構」とある。

クチャ（庫車）は、「雁の童子」の舞台にもなっているが、古代の仏教国亀茲の中心のオアシスで、白須の前掲書においては、第一次大谷探検隊の新疆隊がそこで撮影した「音楽隊」の写真を掲げている。クチャは「亀茲楽」という古典音楽が盛んな仏教と音楽の都であったとしている。

大谷隊は、ここで「千仏洞」の発掘調査を行っている。そのクムトラ千仏洞から第一次大谷探検隊が発掘、将来した「菩薩頭部塑像」（東京国立博物館所蔵）を木下杢太郎がスケッチし、斎藤茂吉が『赤光』に掲載したという。賢治にも菩薩頭部の絵があり、関連を推測させる。このクムトラ千仏洞は、1913年にドイツの第四次調査隊のルコックも訪れて、ここに「キンナラ窟」の呼称を与えたという（白須浄眞『忘れられた明治の探険家　渡辺哲信』中央公論社　1992）。この仏洞の天井に描かれた「人の顔に鳥の体をした鳥人を、美声で歌い踊るインドの音楽神キンナラとみなしたから」だという。音楽と仏教との関連を示す楽人の画像は、詩「小岩井農場」の緊那羅の子供の幻想を想起させて興味深い。

2015年秋、筆者は、甘粛省、酒泉出身で、「雁の童子」を卒論で取り上げ、賢治研究を志す留学生とともに、大谷探検隊の活動について龍谷大学図書館で調査した。そこで、島地大等及びその周辺の僧侶たちの活動を詳細に知ることができた。これについては、「宮沢賢治「西域」作品と島地大等の印度仏蹟探検―作品「マグノリアの木」を視座に」（秋枝・鄭亜楠、共同執筆）と題して、『福山大学人間文化学部紀要　16号』（2016年３月）にリポジトリで公開予定である。島地大等の仏蹟探検について、詳細は本論文を参照していただきたい。島地大等の展示についても、今後追加の資料を提供することが可能である。

「星めぐりの歌」小考 ―鷲とへび―

宮沢賢治記念館リニューアル・アドバイザー　加倉井　厚　夫

賢治の歌曲「星めぐりの歌」は、歌詞全体を通して星々がテーマとなっています。天文学の知識から一定の解釈を行うことも可能で、例えば歌い出しの「赤いめだまのさそり」は、さそり座の赤い一等星アンタレスを「めだま」に見立てて、さそり座の特徴としています。今回は、そんな解釈について、歌詞の第一連から「鷲」と「へび」の部分を紹介したいと思います。

まず、原文を童話「双子の星」から引用しておきましょう。（自筆原稿は縦書きです。）

あかいめだまの　さそり
ひろげた鷲の　つばさ
あをいめだまの　小いぬ、
ひかりのへびの　とぐろ。

一行目はさそり座、二行目はわし座、三行目にはこいぬ座といった具合に、星座が登場しています。これらは非常に明瞭で、それぞれの星座における特徴的な部分をあげて、それをもとに星座を表現しています。

「ひろげた鷲の　つばさ」とあるわし座は、七夕

では彦星（牽牛）と呼ばれる一等星のアルタイルと、その周辺のいくつもの恒星から成り立つ星座です。古い星座絵図を見ると、鷲が翼をひろげた姿が描かれています。まさに賢治の書いたとおりというわけです。

しかし、これには少々疑問があります。明治から大正期の天文書の解説や図版の状況を調べると、「恒星」の配列と「星座としてイメージされるべき姿」との関係が明確に示されているものはほとんどありません。例えば、賢治が所有していたとされる日本天文学会編『星座早見』(三省堂）では、恒星が線で結ばれてはいますが、それを見て星座の具体的な姿（わし座であれば、どの星が頭か、どの星が翼なのか等）が思い浮かべられるものは数えるほどしかないのです。

つまり、賢治（当時の人々）が星座としてイメージしていた姿は、星座の正しい知識よりも、星座名をもとに、星空を見た際の想像力に依存していたと言うことができます。賢治が星座の正しい知識に基づき「鷲が翼をひろげた姿」を認識していた可能性は、極めて低いと考えられるのです。

では、そのような状況で実際の星空でわし座を眺めるとどうでしょうか。はじめに一等星のアルタイルを見つければ、すぐ両脇には二星（β星、γ星）がほぼ等間隔に並んでいることにも気付くことでしょう。星座名の「鷲」から連想すれば、それがちょうど「鷲」の両翼、「つばさ」のようにも見えてきます。これが賢治の「ひろげた鷲のつばさ」の認識ではないでしょうか。

一方、アルタイルという言葉の意味は「飛ぶ鷲」とされているのですが、その理由は先に説明した隣接する二星が翼のように見える状況を踏まえてのことで、アメリカの博物学者リチャード・ヒンクリー・アレン(1838～1908)による有名な解説書『星の名前とその意味（Star-Names and Their Meanings)』(1899）にも記載されているところです。

賢治はこの書物から「鷲」の「つばさ」のヒントを得ていたとすることも可能ですが、賢治の他作品の星座認識の「自由な」傾向を踏まえれば、書物の知識に拠るものというよりは、賢治自身の発想と理解すべきでしょう。

続いて、四行目の「ひかりのへびの　とぐろ。」です。ここには「へび」が出てきます。「へび」という星座はあるのでしょうか。賢治の時代には、現在使われている星座名やその訳名も公式には未制定でしたが、当時の天文書をあたると「へび」のつく星座は四つ（海蛇、蛇、蛇遣ひ、小海蛇）で、その中に確かに見つけることができます。

宮沢賢治記念館設立時に、賢治と星の研究者として展示に携わった草下英明（1924～1991）は、その著書『宮沢賢治と星』(1953）の中で、この歌詞の解釈を次のとおり記しています。

「ひかりのへびのとぐろ」は蛇座で、夏の蝎座の上に、神医エスクラピウスの蛇遣い座の手に握られた蛇であるが、別にとぐろは巻いていない。

やはり「蛇座」という説明です。しかし、その一方で、（星座絵図に描かれた）蛇の姿を見ても「とぐろは巻いていない」と疑問を呈しています。・・・

私自身はこのことに加え、賢治が「ひかりのへび」としたことの意味についてもずっと理解できずにいました。なぜ「ひかり」なのか…。

ここで視点を変えて、星座ではなく、渦巻状の銀河（賢治の時代は星雲）としたらどうでしょうか。写真を見るとまさに「ひかりのへび」で、もちろん「とぐろ」を巻いているようにも見えます。

渦巻状の銀河
（新城新蔵著『宇宙進化論』(1916)よりM51）

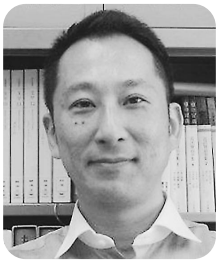
「星めぐりの歌」は、冒頭から星座が三つ続けて出てきます。普通に連想すれば四番目も星座となりますが、第二連に「アンドロメダのくも」（＝アンドロメダ座大銀河、あるいはアンドロメダ座大星雲）が出てくることを念頭におけば、「ひかりのへび」が渦巻状の銀河（星雲）であっても違和感

はないはずです。

また、はじめに引用した原文に注目してみてください。なぜか読点が三行目末尾にだけについています。これは、一行目から三行目までが星座であり、四行目が銀河（星雲）と解釈すれば、内容に基づき読点で区分されているわけで、ひとつの必然であることがわかります。

宮沢賢治と「農」の世界の体験を

宮沢賢治記念館リニューアル・アドバイザー　大　島　丈　志



2015年４月25日(土)にリニューアルオープンした宮沢賢治記念館の展示において、「宙・科学・芸術・農・祈」の五つの分野のうち「農」分野について、主にパネル展示のアドバイザーとして参加させていただきました。

宮沢賢治が、進学した盛岡高等農林学校で「農」を学び、稗貫農学校（後の花巻農学校）の教員として「農」を教え、昭和初期から「農」の実践を行ったことは、大変有名です。

賢治と「農」との関係は、実践の結果としては稲作の肥料設計が多数残されています。ただそれだけではなく、賢治の詩・散文に大きな影響を与えています。

宮沢賢治記念館は1982年９月21日に開館しており、約32年前ですので、「農」に関しても、当然ながら古くなってしまった情報や、現在内容が変わっているものなどがあります。アドバイザーという立場でしたが、従来の展示物に敬意を払いつつ、修整するものは修整し、情報が新しくなったものは積極的に更新していくことをリニューアルに関係した皆さんと考えました。

今回のリニューアルした「農」の分野で新しく追加した情報として注目してほしい点は四つあります。

一つ目は、賢治の花卉・蔬菜栽培について触れたことです。賢治の「農」の実践は、稲作指導にとどまらず、花卉や蔬菜栽培を重視したものでした。

二つ目は、労農党と賢治との関係に触れたことです。労農党稗貫支部に賢治のカンパがあったことは当時の賢治の立ち位置を考える上で重要だと考えられます。賢治と労農党との関係は今後も丁寧に検証されていかなければならない問題だと思います。

三つ目は、産業組合や農会といった農業団体と賢治との関わりについてです。このことは賢治の「農」と同時代の賢治周辺の状況とのかかわりを考える上で外せないと思います。

賢治の「農」の実践を考えると、羅須地人協会では講義や音楽会を行っていたものの、当時の農業の流れとは距離のある孤独・独特な作業であったというイメージでとらえられがちです。しかし、当時の農会や産業組合といった組織と賢治が関わり、最新の情報を吸収し、連絡を取り合っていたことは、伝記的資料に残されています。その影響は詩、散文、例えば「ポラーノの広場」にも表現されており、賢治の伝記研究・作品研究において看過することはできないものです。賢治が地域との連携の中で活動していたということ、特に盛岡高等農林卒業生のネットワークの中にいたことは触れておかなければならないと思います。

四つ目は、宮沢賢治の「農」の世界観についてです。賢治の「農」への関心や実践が最も色濃く出たのは「グスコーブドリの伝記」（『児童文学』1932年）でしょう。そこではオリザという稲に近似する作物の栽培の様子が描かれています。

ただ作品として描かれたのは平地の稲作地帯のみではありません。むしろ花巻農学校時代に刊行された童話集『注文の多い料理店』（1924年）には稲作の様子は殆んど描かれず、山の生活が描かれます。ブナ林の広がる明るい山地が舞台となるものも多くあります。この山の生活について触れるパネルの展示が今回のリニューアルで可能となりました。具体的には「炭焼き」「マタギ」などについて追加されています。賢治作品に描かれている山の生活に想いを馳せていただければ幸いです。

以上の新しい情報から見えてくるのは、賢治と「農」との関わりの広がりであると思います。賢治は盛岡高等農林時代を経て、花巻農学校の教師時代から本格的に「農」についての関心を高めていくわけですが、賢治と「農」の関係は多岐にわたり、広く、かつ深いものであると思います。今回のリニューアルにアドバイザーとして参加させていただく中で、改めて実感しました。

宮沢賢治における「農」ということがらは以上のように多岐にわたる内容です。また、当時の農業と今の農業をめぐる状況はかなり違っており、

当時の「農」をめぐる状況を調べないと分かりにくいかもしれません。さらに、賢治の「農」に関してはその成果をめぐって評価は様々に分かれています。ただ、賢治が大正中期からの人生をかけて打込んだものであり、それは作品の表面に、陰に、間違いなく表れているものであり、その点でとても重要だと思います。

今回のリニューアルが、「宙・科学・芸術・農・祈」、そして「農」について触れ、考えていただけるきっかけとなれば、幸いです。

読者の広場　私の宮沢賢治

「独善的で鈍感」な宮沢賢治

山梨県甲州市　田ケ谷 雅夫

宮沢賢治には親友保阪嘉内あての手紙73通が残されているが、文面が一変するのは賢治が保阪あて日蓮宗に帰依するよう烈しい折伏を始めてからのことである。何しろ賢治は「南無妙法蓮華経」をペン字で28回も書き連ねているのだ。そのあとも「しっかりやりませう」と21回連書した手紙もあり、これではもらった嘉内はたまったものではなかったろう。

賢治の折伏はあまりにも強引に過ぎ、相手の立場を思いやる余裕に些か欠けていた。嘉内の家は元来神道系だし、当時は母親逝去で嘉内は精神的に打ちひしがれていた。だから嘉内は鳥取の友人河本義行にあてて、賢治の折伏は「余りにも僭越至極のこと」ときびしく賢治を批判したのである。無理ないことだ。

しかし、私はそういう賢治の他人への言わば「独善的で鈍感」な姿勢が痛いほどよく分かるのである。賢治がそういう生き方でしか短い生涯をひたむきに走らざるを得なかったことが、私にはあわれで不憫でならない。そして、賢治が功を急ぐ余りに無二の親友保阪嘉内を失った悲劇は、きっと二人のその後の人生の大きな成長に役立ったものと思っている。

賢治を知った日

岩手県奥州市　武田 洋子

昭和30年代の我が家のおじょいの風景を思い出す。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは、個人の幸福は、ありえない・・・」

父が友人たちとお酒を酌み交わしながら朗読していた。

「それば書いた人ば、知っておりあんす。質屋に座っていだったなぁ。顔の色が白ぐてなぁ。肺を病んでるんだべかな、と思いあんしたった。店の中は暗がったのっす。その白い顔が浮かび上がって見えあんしたった。」

花巻からの来客が、お猪口片手に、とつとつと語っていた。

その人とは、宮沢賢治だった。

質屋に通う人達との対応は、彼にどれほどの影響を与えたのだろうか。社会で苦しむ人々の姿を肌で感じ取る日々だったに違いない。彼の感性からすれば、自身の幸福の追求などあり得ないはずだ。生家の家業は、彼の文学を生む原点に思える。病で早世したのが、残念でならない。

「タネヤマ・アピール」

神奈川県横浜市　髙村 和夫

賢治がこよなく愛した種山高原で観賞した「原体剣舞連」の感激は今なお心に深く刻まれている。その地で平成22年７月27日、第11回「グスコーブドリの大学校」が開かれ、全員が賛同して斉藤文一先生が提唱した「タネヤマ・アピール」を宣言した。

あらゆるものはいのちのひとつ
ここは森と銀河とのまつり
剣舞戦士の郷、種山高原である
罪や、かなしみでさえ
そこでは堅くきれいにかがやいている
まずもろともに
かがやく宇宙の微塵となりて
無方のそらに散らばろう

翌々年７月26日、宮澤和樹さんが出席されて「タネヤマ・アピール」碑建立記念式が、「風の又三郎」像が建つ種山高原星座の森で行われた。

例年「グスコーブドリの大学校」の閉校式に、斉藤先生が作詩した「わが村イーハトーブ、わが愛」を全員で斉唱するようになった。この高原か

ら去りがたい気持ちで斉唱すると、」遠くから「来年も来いよ！」と賢治の声が聞こえてくる。「来るよ！」との返事は透明な風に乗って、賢治とリハビリ中の斉藤先生に届いたと思う。

先生のご回復を心から祈っています。

来館者の声

記帳ノートから

No. 344～346

今日、60才にして初めて賢治さんの魂に触れました。懐かしい友に久々に会ったような感覚です。旅の途中にふと立ち寄ったのですが、こんなに深い感動を覚えたのは久しぶりです。花巻ってすてきな所ですね。

賢治さんの精神力の根底には法華経の信仰心が有ったんだなあと感じました。誰しも美しいものを感じ万物を慈しむ心が有るのだから、自分も今生きていることをもっともっと楽しみ、幸せな気持ちになれるよう、視点を変え心を鍛えていきたいと思いました。また来ます。

20年以上前に家族と来て、今日は友人と。『銀河鉄道の夜』の大ファンです。賢治は津波と縁がありますね。東日本大震災を経験して、さらに賢治さんの思いがひしひしと感じます。岩手を愛し、人を愛し、宇宙を愛した賢治さん。もっと長生きしてもっとたくさんの物語を書いて欲しかった。直筆を見ると、賢治さんの呼吸を感じ感動。

ゆったりした自然と賢治の世界の創作の豊かさ（心と頭の中をかけ巡る言葉の嵐）がとても印象的でした。こんな風に心の風景を言葉にしていく作業をして行ければ幸せだなあと思いました。

昔は「雨ニモマケズ」手帳しか印象に残っていなかったのですが・・・。リニューアルされた展示の量に圧倒されました。でも、全部詳しく見るには時間と体力が必要と痛感しました。賢治が大好きですから、これからも来るつもりです。

賢治は失敗の繰り返し、求めても達成できなかったことを強く感じました。でも、その思いは尊いように感じます。

宮沢賢治の作品が大好きです。なかでも一番好きな『銀河鉄道の夜』の推敲段階が分かりやすく展示されていたのでうれしかったです。どこでどう変わったかなど知らないことがよく分かりました。

「賢治の世界」セミナー

当館では、平成23年度から「賢治の世界」セミナー（出前講座）を市内の主に小・中学校を会場に継続開催しています。今年度は賢治の作品や音楽、願いなどについて、14会場（参加者約1800人）で実施しました。講師さん方は子供たちによく分かってもらえるように、作品を紙芝居や一人芝居、朗読と演奏、映像やエピソードなどいろいろ工夫しながら講演して下さいました。

子供たちは、「賢治さんが作った童話をもっと読んでみたい。」「農民のために尽くし続けたところがすごい。」「音楽と映像と朗読から、よだかのつらい気持ちがよく伝わってきました。」などととという感想を持ちました。また、学習発表会の自分の演技と比べて、講師さんの演技や語りはすごいという感想を持った子もいました。この興味・関心を基にいろいろな方向から「賢治の世界」へ入り込んでもらいたいものです。

大型布絵紙芝居「セロ弾きのゴーシュ」講師は、萩原 陽子 氏

「賢治さんの生涯と農業」について講師は、舘野 廣幸 氏

■第2･3回 賢治の世界ワークショップ

「賢治作品の舞台＆科学世界」を訪ねて
～金色堂・宇宙遊学館（平泉町・奥州市）～

10月21日、好天に恵まれ18名で賢治作品の舞台を訪ねました。まず、向かったのは平泉です。2011年にユネスコ世界文化遺産に登録されたこともあり、内外の観光客で賑わっていましたが、賢治の詩碑は金色堂の拝観受付所を通ってすぐ右手にありました。

七重の舎利の小塔に　蓋なすや緑の燐光
大盗は銀のかたびら　おろがむとまづ膝だてば
赭のまなこたゞつぶらにて　もろの肱映えかゞやけり
手触れ得ぬ舎利の寶塔　大盗は禮して沒ゆる

賢治は、1912年の５月、盛岡中学校４年生の修学旅行の帰路をはじめ何度か平泉を訪れ、短歌や詩を書きました。その中から1959年の金色堂建立850年祭に上記の詩が選ばれ、碑として建立されました。平泉には何度も訪れているのに、この碑を見るのは初めてという参加者がほとんどなので、興味津々。表示板や歩道が整備されましたので、関心のある方は見逃さずに済みます。それにしても賢治さんの詩の「大盗」は誰を指しているのでしょうか。頼朝、秀吉、それとも・・興味は尽きません。

中尊寺金色堂入り口付近の碑の前で記念写真
賢治さんのお陰なのかさわやかな好天でした

その後、宇宙遊学館を訪問しました。木村栄水沢緯度観測所初代所長のＺ項の発見、今日のＩＬＣ誘致の取り組み等の説明に続いて、理事長さんから、賢治さんはここを訪れ、気象のデータを米の収穫につなげようと頑張ったことや風の精の登場する「風野又三郎」にも水沢の臨時緯度観測所、木村博士と技手のテニスへのいたずらの記述があることを紹介していただきました。

童話「風の又三郎」を読んだことはあるが、「風野又三郎」という童話があることを初めて知りました、さっそく読んでみたいという声が聞かれました。賢治さんと同じ花巻に住んでいるとはいえ、まだまだ知らないことがたくさんあることを実感し、賢治さんの行動や作品への興味・感心をさらにかき立てられるワークショップとなりました。

奥州宇宙遊学館理事長　大江 昌嗣 氏
熱心なご説明に驚くことばかりでした

■第4回 賢治の世界ワークショップ

子ども劇「グスコンブドリの伝記」

賢治記念館主催で５年目となる「子ども劇」は、５月に参加者を募集、市内６つの学校の小学１年から中学２年までの申し込みがありました。

６月20日(土)イーハトーブ館で顔合わせを行い、いよいよ練習スタート。初参加が６名、しかも異なる学校からで学年もバラバラ、緊張の瞬間です。12月23日(水・祝)の発表会に向け、演出・指導は劇団らあすの牛崎志津子さん、ハルモニアの高橋摩利子さんには劇中歌作曲と歌唱指導、当日の演奏を担当いただきました。

今年取り組んだ賢治作品は、童話「グスコンブドリの伝記」。よく知られる「グスコーブドリの伝記」は人間世界、初期形「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」はおばけの世界、そのふたつの世界を行き来する不思議な物語です。

当日は、キャスト19名、高橋摩利子さんと小・中学生７名が生演奏で参加し、イーハトーブ館ホールで午後１時30分開演しました。

子どもたちは、歌あり踊りありの100分間の舞台を元気いっぱい演じ、フィナーレでは観客からのたくさんの拍手で会場が包まれました。賢治さんも温かく見守ってくれていたことでしょう。

ご指導の先生方、独創的なお化けの衣装を作っていただいた鎌田久美子さんをはじめ、スタッフ

の皆様、保護者の皆様、また関係者の皆様、本当にありがとうございました。

「グスコンブドリの伝記」色々なお化けがいっぱい

■第5回 賢治の世界ワークショップ

「賢治さんの鳥を探そう」

～野鳥観察の森 ネイチャーセンターを訪ねて～

『二十六夜』や『よだかの星』など賢治さんの作品にはいろいろな鳥が登場します。そこで、２月27日、講師を賢治研究家でカメラマンの赤田秀子さん、花巻野鳥の会の似内功孝会長と会員の方々にお願いし、総勢28名で滝沢市のネイチャーセンターを訪れました。

さっそくセンターのガラス窓越しに餌場を見ると、たくさんのシジュウカラ、ヤマガラ、シメなどの小鳥が、かわいらしい声をあげて餌を盛んについばんでいました。

しばらくすると、頭とおしりの部分が赤くひときわ目立つ鳥が、縄状の落花生の餌に来て止まりました。アカゲラです。参加者の視線が一ヶ所に集まり、シャッターの音がせわしなく鳴りました。今日は、車中を含め16種類の鳥を観ることができたことを講話の中で確認しました。

赤田さんは、「賢治文学には80種ほどの鳥が登場するので、それを解読すると人生は10倍楽しくなります。」「賢治文学のモズはムクドリです。」ということも話されました。

花巻への帰路、北に飛び立つ準備をしている白鳥の群れが見られました。鳥を学習した帰りでもあり、みんなで長旅の無事を祈りました。

今後の開催事業について

宮沢賢治記念館　特別展のおしらせ

1「雨ニモマケズ」展

日本の国内はもちろん、世界でも多用な広がりをみせている「雨ニモマケズ」・・・・。

この度の賢治生誕120年を機に、より多くの方に「雨ニモマケズ」を知ってもらいたい、そして、この宮沢賢治記念館で「実物」を見てもらいたい、そういった願いを込めて「雨ニモマケズ」が書かれた賢治自筆の手帳と、高村光太郎が揮毫した「雨ニモマケズ詩碑」の原文を展示いたします。いずれの資料も宮沢賢治記念館では初公開となります。どうぞ、この機会をお見逃しなく!!

会期

前期　平成28年８月20日(土)～８月28日(日)
後期　平成28年９月１日(木)～９月11日(日)

※前期は「雨ニモマケズ手帳」、「雨ニモマケズ詩碑原文」の自筆資料を公開、後期は複製資料に入替となります。

2「賢治の青春」展

宮沢賢治が盛岡高等農林在学中に、学友の保阪嘉内、小菅健吉、河本義行らとともに創刊した文芸同人誌「アザリア」。今回の特別展では「アザリア」全６巻と、同人の保阪嘉内に宛てた書簡数通を紹介します。賢治の保阪嘉内あて書簡がみられる機会も限られますが、「アザリア」全６巻が揃って見られるのは当館の特別展だけです。

多感で表現性に溢れた賢治の青春時代を当時の資料から感じていただければと思います。

会期　平成28年９月17日(土)～９月25日(日)

編集後記

今回は、当館の展示について、リニューアルアドバイザーの方々に詳しく解説をいただきました。

当館では、来館者の皆様に親しんでいただけるよう、展示に４ヶ国のＱＲコードを付けたり、展示内容について、毎月、ギャラリートークを実施しております。

花巻市は、今年、賢治生誕120年の節目の年を迎え、様々な記念事業を予定しております。また、岩手国体の様々な競技会場にも指定されておりますので、たくさんの皆様のお出でを心よりお待ち申し上げております。